

三 国 伝 記 と 小 町 物

田 口 和 夫

応永の末年から正長・永享・嘉吉の頃まで

に成立したといわれる『三国伝記』は室町時代を代表する説話集なのだが、能と関係する論考は築瀬一雄氏（『説話文学研究』）、黒田正男氏（『世阿弥能楽論の研究』）によるものほかは管見には見えない。これは説話研究の方でなおざりにされてきたということと表裏の関係にあるのであろう。最近では複製（国会図書館本、『古典資料』）、翻刻（池上洵一氏校注、三弥井書店、上のみ）があつて、ようやく研究が進展しつつある所である。

ここでは巻十二第六話「小野小町盛衰事」をとりあげてみたい。

和云昔小野小町ト云美女アリ。出羽郡司小野好実ト云者、大和守ニ成テ上洛シケル時、近江国玉造ノ庄ノ辺ニテ小女ニ行合テ、即猶子トセリ。即小野ノ者也。（以下、小町の美貌、家族の死、「ワビヌレバ」の歌があり、おちぶれて）宛如^{アヲキ}乞^{アヲキ}人^ノ、山野^ニ迷^{アツキ}行^キ、後^ニ会^ニ坂^ノ関^ノ寺^ノノ^ミ辺^ニ徘徊^スカクゾ詠シケル（「あはれなり」の歌、次に「有カナク」の歌、そして死にのぞんで）草庵ノ柱ニソ書付ケル、

ヲハルマデ身ヲバ身ソコハ思ヒケレミツカラ

シツル野ベノ野ヲクリ 遂に北芒^ノ春^ノ雨^ノ壘^ニ々タル青塚之辺、東岱ノ秋風歴々タル白楊之本ニソ終ケル。（弘法大師がその歌をみて）小町ハ心在ル者ナルニヤ。死セル処ハ何クゾト問セ玉ヘバ、来人彼処ナリト答テ、野ニ分入玉ヘバ、新旧ノ暗魂前後ノ朽骨充滿テ何トモ難^レ知。露副ヘル我涙、袖山風吹シホリ、招クニ似タル花薄ホノカナル気色モアハレナリ。世ノ中ハ秋風立ヌ花薄マネカバユカシ野ヘモ山ヘモ トロズサミテ草村ヲ過行給ヘバ 秋風ノ吹ニツケテモアナメク小野トハ云ハジ薄オヒタリ ト歌ヲ詠ズル者アリ。

ハ云ハジ薄オヒタリ ト歌ヲ詠ズル者アリ。声ヲ尋テ見玉ヘバ白ク曝タル髑髏、眼ノ穴ヨリ薄生ヒ貫ヌキテ有ケルガ詠ジケル也。（大師は）即其白首ヲ取テ高野山ニ納メテ小野ヲ御訪アリケリ。（そして）小町先^ニ天生ノ果ヲ得タリ。（古典資料国会図書館本）。濁点句読点をおぎない、略抄した）
1、小野良実の娘であること。片桐洋一氏『小野小町追跡』は小町説話のひろがりを的確に分析して参考になる。ただし本話はとり

あげられていない。片桐氏は「卒都婆小町」における小町の名のりは「二条家末流の『古今集注釈』にかなり一般的であった説を用いたものとされる。もつとも玉造の庄でみいだされて猶子となったものという説は傾阿説にもなく、注目すべきものであるが「子」であることには相違はない。

2、逢坂関寺の辺 「関寺小町」や「鸚鵡小町」において小町が関寺辺に住居していることになっているが、本話はそのふるい例となろう。

3、「あなめあなめ」の歌の場 片桐氏の整理によれば、(イ)異本系「小町集」「和歌童蒙抄」の類と(ロ)「江家次第」「無名抄」「古事談」の類があつて(ハ)は髑髏の世話をした人の名がしるされず、歌は髑髏だけがよんだものであり、(ニ)は業平がかかわり、陸奥を舞台とし、短連歌の唱和となつていゝという。本話は弘法大師が世話をし、髑髏が歌をよむという構成で、場所は明記していないのである。特異な様相といえよう。「通小町」で市原野へ小町をとむらいにゆくと設定されるのは、陸奥と明記してあつてはむずかしからう。本話でも末尾に「北塞ノ薄ノ下ニハ雖^レ曝^ス遺骸於斜日之景^ニ」とあるので陸奥の可能性はあるのだが、それでも明記したものよりは能に近づきうるであらう。

4、花薄招くこと 和歌としてめずらしい表現ではないが、ここにしるされることは「通小町」の「尾花招かば止れかし」を連想させよう。

5、弘法大師が小町のあとをとむらうために野へわけいって、あなめくゝの詠をきき、髑髏をみることに。これはワキ僧がシテの回向をするために市原野へゆくという「通小町」の設定と共通するのである。

6、大師が小町の白骨を高野山におさめて回向すること これは高野聖の廻国納骨の慣習を背景としているのだが、「卒都婆小町」のワキ僧が「高野山より出でたる」ものであることとかわりがある。毛越寺延年の能「卒土婆小町」では小町と少将が「打連れて高野の山に上り、ここに小町が卒土婆に腰を下して大師にとがめられる」（本田安次氏「毛越寺の延年の舞」）。これだと、より説話にちかひであろう。もっとも観阿弥の能でもワキ僧の道行は「花月」にはふさわしいが、ここでは親子についてとく必要はなく、シテの道行はすくなくとも玉津島までは到着していた筈である所からみて、延年能のようにその場を高野山として形成されていた可能性はあるから、やはり説話にちかかったかもしれない。

以上、本話と能との関係を瞥見してきたが、そういっても『三国伝記』がそのまま小町物の

の能の形成に影響しているというつもりではない。黒田氏は両方の編・作者の志向した方向に「相通うところがあったから」と結論づけていられる。そのとおりだが、もう一歩すすめて『三国伝記』が「近江と特殊な関係にあり、天台宗に関係する」僧によって編纂された（池上氏による）という事実と「通小町」が「根本、山徒に唱導の有しが書」（『申楽議儀』思想大系による）いたものでもあるという事実をかんがえあわせるべきであろう。

『三国伝記』にとられた説話は「通小町」の原作者である天台系の唱導師たちによって管理されていた可能性が、そのような能の原作（あるいは資料提供）者との共通性が両者の類似関係をもたらしたとみるべきであるとおもうのである。蛇足ながら「卒都婆小町」においても小町が「むつかしの僧の教化や」というところから唱導僧の面影をみることできよう。同曲で典拠未詳の「一見卒都婆永離三惡道」も『伝記』第十二「只觸^ル卒都婆^ニ中^レ風^ニ衆生尚^ハ離^ハ三惡道」、第十三「一見^ニ輩^ヲ漸^ク閉^シ黒暗^ニ三途之門^ト」と共通の論理であり、そのほか「是即大日如来、三麻耶形也」（第十三）は『言泉集』にもみえ、唱導でもつねにかたられるものであったことなどが注目されよう。八一九八〇・一〇・二七V
八たぐちかずお 静岡英和女学院短大・教授V